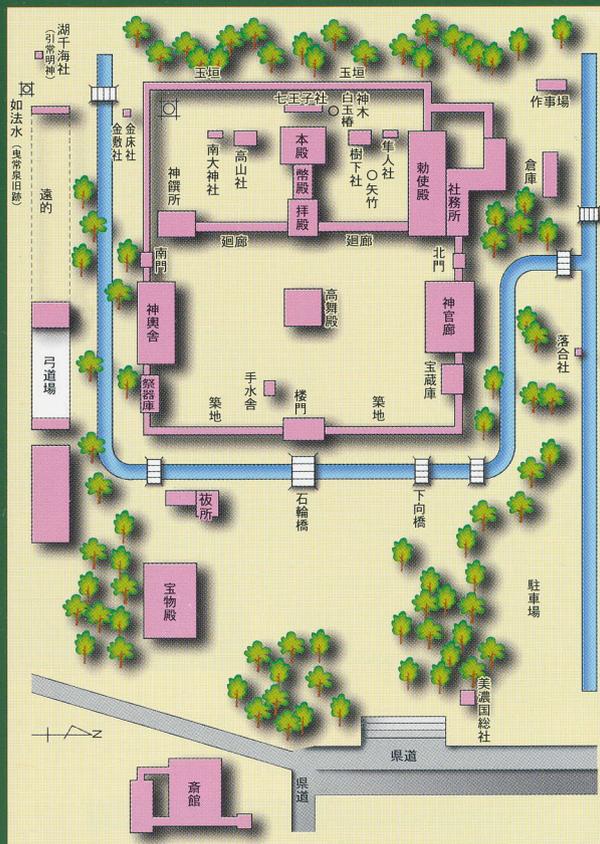


南宮大社略誌



〒503-2124
 岐阜県不破郡垂井町宮代1734番地の1
TEL0584-22-1225

境内の名木・史蹟

当社は、濃尾平野の扇の要に位置し、伊吹山と養老山系の中間にあたる美濃仲山（南宮山）山麓に鎮座され、全山百町歩を境内として、まさに幽邃（ゆうすい）な神域であります。この地はまた、古来不破の関を西に構え、東に中山道と美濃路の分れる基点として、更には伊勢街道・北国街道にも通ずる要所として重要視されて来ました。境内のみならず、この周辺には古くから名所・旧蹟が多数残されています。

一ツ松

美濃仲山（南宮山）は、古く万葉集には「不破山」、清少納言の「枕草子」には「みのお山」と見え、又、古歌にも「みのお山のひとつ松」と詠まれ、古くより文学上の名木でありました。

新古今和歌集 伊勢

おもひいづや みの、御山の ひとつ松
契りしことは いつもわすれず

神木白玉椿

当社の御神木は白玉椿であります。椿は古来芽出度い常磐木（ときわぎ）として珍重されて来ました。社伝によれば、古く宮中に豊明節会（とよのあかりのせちえ）が行われる度毎に、当社の巫子（みこ）がこの神木の椿の枝を捧持して都路を上り、節会の庭でうるわしくひとさし舞納めて、これを献上したと伝えています。

夫木抄 宝治二年豊明節会に百首の歌奉る時 従二位行家卿

美濃山の白玉椿 一つよりか
豊のあかりに あひはじめむ



経塚群

平安時代より、全国の社寺の境内や山頂、景勝地に写経を入れた筒篋を土中に納めて国家安泰、後生安楽を祈ったことが歴史に記されています。南宮山々頂には、全国にも稀な経塚群があり、県の史跡としての指定をうけています。

曳（引）常泉

聖武天皇の御代天平十二年（七四〇）に、当美濃国不破頓宮に行幸され、宮処寺と曳常泉に巡幸されたことが続日本紀に見えています。又、後白河法皇勅撰の梁塵秘抄（りょうじんひしょう）には「南宮の宮には泉出でて…」と詠まれています。この曳常泉は、その名の如く、常に絶えることなく、豊かな水を湧き出す泉であり、千二百余年を経た現在も、引常明神の近くにその清らかな麗水をたたえています。

宝物

刀 剣

美濃国は、古くから刀鍛冶が住んだと云われ、殊に、赤坂・関の刀鍛冶は全国的に有名であります。延喜式兵部省の条には美濃国から二十口の横刀が献納され、全国でも最も多数であります。

当社は、御祭神金山彦命の御神威を仰いで、古来、数十振の刀剣が奉納されています。

一、三条宗近 沓口 国指定重文
全国にも数少なく、県内随一の名刀

一、康光 沓口 国指定重文
重さ三・七五キロ（一貫匁）の巨大な名刀

美濃守護職の土岐氏の奉納と伝う

一、鉾 式口 無銘・国指定重文
奈良朝期のもの。これと同類の鉾は正倉院のみに伝えられる。

一、その他 七口 県指定重文
関の孫六、赤坂正国、清水住岩捲・元真、吉則、伝天国の剣等

胴 丸 沓領 県指定重文
室町期の作・県内最古の名品

斎藤道三着用したの胴丸を竹中伊豆守の奉納と伝う。

驛 鈴

今から千三百余年前、孝徳天皇の大化年間に、諸国駅伝の制が定められ、公儀の旅には鈴契（すずしるし）が用いられたことが日本書紀に見えています。当社の駅鈴は、平安時代後一条天皇御即位の大嘗祭に、当社が諸国の大社四十八社の中に選ばれて、奉獻された由緒深い名宝であります。



三条宗近



特殊神事

二月節分日 節分祭（大的神事）

直径五尺二寸（一米五七）の大的に十二本の矢を射て魔除けと、五穀豊饒とを祈る神事。当社の御祭神が、斎庭の矢竹を以って、平将門の怨霊の首を射落されたと言う故事に由来する神事でもあります。

四月十五日 奥宮高山神社例祭（椿祭）

五月四日 御田植祭 午後三時から

内庭に斎田を仮設し、早乙女（さおとめ）と呼ばれる少女（三才～五才位）二十一人が、手甲・櫛姿で、金の雄蝶、銀の雌蝶の折紙を髪につけ、囃子方の太鼓、笛、鼓の田植歌に合わせて、松葉を苗に見立てて植えつける神事で、古くは末社御田代（みとしろ）神社の斎田で行われたものであります。（国指定重要無形民俗文化財）

五月五日 例大祭（神幸式・蛇山神事）

当郡府中に鎮座される御旅神社へ神輿三基の神幸祭が行われます。途中、市場野という祭礼場に、高さ十三米、周囲二十米の蛇山と称する櫓を組み立て、これに波模様の幕を緋（た）らし、この頂上の隅には神木の松と竜の尾を示す剣を取りつけて、神輿の通過や駐輦の時「ドンドコドンコ」の囃子に合わせて勢いよく蛇頭を上下左右にゆり動かし、口を開閉させます。これは美濃国の置山の「からくり」の始まりといわれ、また神輿が還幸し、市場野駐輦の時、蛇山の前に連結された車楽（だんじり）では、その年に選ばれた少年男子四人が、各々の囃子唄に合わせて、還幸舞（かんこうのまい）〔羯鼓舞（かっこのまい）・脱下舞（ぬきさげのまい）・竜子舞（りゅうしのまい）〕と呼ばれる三種の舞楽を交互に演舞します。（国指定重要無形民俗文化財）

六月三十日 大祓式【茅（ち）の輪くぐり】

十一月八日 金山祭【糶祭（ふいごまつり）】 午前十時半から

古来、当社の鎮座祭とされ、特殊神饌が献ぜられます。金の総本宮として全国の鉱山金属業者が多数参拝し、祭典中に、刀匠奉仕による古式ゆかしい鍛錬式が奉仕されます。

金山彦命

破魔除災
の守護神
金運招福

御由緒

御祭神金山彦命は、神話に古く、伊勢神宮の天照大神（あまてらすおおみかみ）の兄神に当らせられる大神様であります。社伝によれば、神武天皇東征の砌、金鷄を輔（たす）けて大いに靈験を顕わされた故を以って、当郡府中に祀らせられ、後に人皇十代崇神天皇の御代に、美濃仲山麓の現在地に奉遷され、古くは仲山金山彦神社と申し上げたが、国府から南方に位する故に南宮大社と云われる様になったと伝えます。御神位は古く既に貞観十五年（八七三）に正二位に叙せられ、延喜式の神名帳には美濃国三十九座の内、当社のみ国幣大社として、名神祭にも預る大社に列せられています。天慶三年（九四〇）、平将門の乱の誅伏の勅願や、康平年中（一〇五八〜六五）安部貞任（さだとう）追討の神験によつて、正一位勲一等の神位勲等を極められ、以来、鎌倉、室町、戦国の世を通じて、源氏、北条氏、土岐氏等の有力な武将の崇敬をうけ、美濃国一宮として、亦、金の神の総本宮として、朝野の崇敬極めて厚い名大社であります。

御社殿

現在の社殿は、天下分け目の関ヶ原合戦の折、兵火にかかって炎上の為、再建を願う美濃国人の只管（ひたすら）なる念願と、この西濃に生（お）い育った春日局（家光公の乳母）や、竹中伊豆守（竹中半兵衛の一族）等の厚い崇敬心と俟って、寛永十九年の秋九月、徳川三代将軍家光公の天下普請によつて、旧構のままに造営されたものであります。以来、歴代將軍の替る毎に四百五十石の朱印状を捧げてこれを安堵し、また五十一年目毎の式年遷宮をも、古式を護つて、これを奉仕し続けて来たのであります。豪壮華麗なるこの朱塗の社殿様式は、正（まさ）しく御神威表徴する独自の社殿様式であり、世に「南宮造り」とも称せられる名建築であります。寛永御造営の棟札を始め、膨大な造営文書六百二十三冊を蔵し、これには明治維新の神仏判然令によつて移築された堂塔をも含めて、細大洩さず、その経費が明示され、全国的にも極めて貴重な史料として、御社殿・石鳥居・石輪橋等十八棟と共に国の重要文化財に指定されています。



ふいご祭（鍛錬式）



羯鼓舞



還幸舞（竜子舞）



金山彦命を主祭神に、旧国幣大社で美濃国一の宮として、また全国の鉾山、金属業の総本宮として、今も深い崇敬を集めています。現在の建物は、慶長五年（一六〇〇年）の関ヶ原合戦の兵火によって焼失したものを、寛永十九年（一六四二年）、春日の局の願いにより三代將軍徳川家光公が再建したものであります。広い境内には本殿・拜殿・楼門など、朱塗りの華麗な姿を並べ、江戸時代の神社建築の代表的な遺構十八棟が、国の重要文化財に指定されています。年間を通じ大小五〇余の祭典が斎行され、五月五日の例大祭、十一月八日の金山祭（ふいご祭）など特殊な神事があります。



大鳥居

